

復曲能〈菅丞相〉の新演出について

田村良平* (村上 湛)

去る平成二十八年（二〇一六年）五月二十六日、東京・国立能楽堂における「国立能楽堂企画公演・復曲再演の会」で、作者不明の古作〈菅丞相〉の新演出を担当した。シテを勤めた大槻文藏氏（同年、重要無形文化財保持者個人指定Ⅱ人間国宝となられた）の依頼によるものである。この能は演出資料（後述『舞藝六輪次第』）の残る十六世紀初頭から今日まで五百年來、長く上演が絶えていたが、平成十四年（二〇〇二年）四月「菅公千百年祭」に際し大阪天満宮の委嘱を受けた大槻氏の節付・型付・演出・装束選定・主演、天野文雄氏の監修により、同宮本殿前特設舞台にて初演された稀曲である。爾來上演を重ね、最近では平成二十七年（二〇一五年）八月二日、天野氏が所属する京都造形芸術大学内の京都芸術劇場・春秋座で再演されている。

周知のとおり、世阿弥の藝話を集めた『申楽談儀』に父・観阿弥ゆかりの「天神の能」として言及されるのが現存〈菅丞相〉またはその原型と考えられている。当該部分、能面・大飛出の創意について「飛出は菅

丞相の柘榴くわつと吐き給へるところを打つ」とあるのが、この〈菅丞相〉後シテでの使用を前提にしているものと思われるものである。もっとも、〈菅丞相〉は上演の絶えた廃曲であり、これを換骨奪胎して新作された現行曲〈雷電〉は前シテが本来は童子（現行では三日月や怪士）、後シテでは顰の面を常用し、前後とも通例だと大飛出は用いないから、「菅丞相の柘榴くわつと吐き給へる」容貌として飛出の面を用いる例は、現在では跡を絶ってしまっているのが実情である。

そもそも天神説話を扱う古作の番外曲には二曲が知られている。その一つが〈一夜天神〉（異名〈星天神〉）で、現存本では菅原道真が没し靈廟・安楽寺（現天満宮）のある太宰府を舞台に、明星を本地とする天神が出現して遊舞を見せる趣向である。ただし、現存は改作異本であり、これとは別に今は散逸した同名異曲が存在した可能性が想定される。すなわち、天神説話で「一夜」と言えば、絵画化されて「綱敷天神」として知られる憤怒の形相「一夜白髪の御影」が連想されるのが普通であって、これは無実の罪に憤激するあまり一夜にして白髪に変じた菅公怒りの姿を描く、天神画像のきわめて著名な一形式である。これを念頭に置くと、〈一夜天神〉と曲名を据えた場合、現存〈一夜天神〉Ⅱ〈星天神〉のように憤怒の演技を見せず神体の遊舞に終始する内容では落ち着かない。つまり、恐ろしい白髪の怨霊が登場する今や散逸した別作〈一夜天神〉があったのではないか、との推察が可能であり、この想像は後述『舞藝六輪次第』からも傍証される。

天神説話を扱う番外曲二曲の内、別の一つが〈菅丞相〉である。こちらは前場の詞章に「(ワキ) 鬢髪さらに引き変へて眉にも霜の翁とは、何しにならせ給ふらん。(シテ) 思ひのあれば一夜にも白髪となるは理

なり」と明記されるとおり、前シテが「一夜白髪の御影」の姿で道真の生涯を懐古すると同時に、中入前では「柘榴天神」の伝説を再現。後場ではツレ・火雷神を率いて荒ぶる雷神と化した正体を見せるなど、まさに天神伝説を集大成した感がある。延喜三年（九〇三年）夏、法性坊尊意の前で道真の霊が怒気を発する「柘榴天神」とは国宝『北野天神縁起絵巻』承久本（北野天満宮蔵）巻五に描かれる逸話だが、この能や後続作〈雷電〉、さらには番外曲〈舞車〉にも祭礼の山車で舞われる曲舞〈妻戸〉の趣向に採られる名場面として、能楽史・藝能史の上では「おなじみ」の素材だ。第十三代天台座主・尊意（八六六〜九四〇年「僧正」は没後贈官）は醍醐天皇の護持僧で、史実では道真（八四五〜九〇三年）よりも年少だが、能ではこれを脚色し、尊意を目上の師僧として敬っている。

これほど盛り沢山な〈菅丞相〉の上演が中絶したのは、コンパクトでまとまりの良い後続作〈雷電〉が人気の座を奪ったためだろう。尊意と道真との間に男色による紐帯を匂わせる師弟関係を想定し前シテを可憐な稚児姿とした〈雷電〉（前述のように現行演出で怪士系の面を使用し成人男子の怨霊として演出するのは本来の作意に反している）が、当時の男色賛美・小人賞翫の価値観に発して全体に情緒的であるの比べ、〈菅丞相〉は骨太な怨念に貫かれているのが特色である（もっとも、永正一五〇四〜二〇年頃に成立したと考えられている金春座系の古演出資料『舞藝六輪次第』に〈菅丞相〉前シテも童子すなわち稚児姿として演出する記録が見られるが、詞章を読む限り童子として造形する根拠は皆無であって、これは後出の類作〈雷電〉に影響された逆輸入の誤演出と私は考える）。

後場で荒ぶる雷神の姿を存分に見せる〈雷電〉はなかなかの傑作だが、

原作に当たるこちらはそのように「暴れ」をあまり見せずくどい説明を省き、最後に一転、改心してしまう結末はあっけないながらも深く、古作の能らしい素朴なドラマになっているのが〈菅丞相〉の特色と言えよう。藝能史的には後に義太夫浄瑠璃の傑作〈菅原伝授手習鑑〉（延享三年一七四六年初演）に集約される天神説話で最も名高い道真の和歌「泣けばこそ」（河内・道明寺での作）と「東風吹かば」（筑紫・太宰府での作）の二首も、〈雷電〉では省かれているものの、この能の前場には洩れなく引用されるのも特色の一つだろう。

今回は主演者・大槻文藏氏に演出に関わる一切を一任されたので、二〇〇二年の復興初演以来受け継がれてきた演出にこだわらず、私意を通すかたちでまったく新たな型を作成した。これに従い扮装についても、前回までの「白頭に若男の前シテ、黒頭・初冠に怪士の後シテ」では本文の意図を達せず、前記『申楽談儀』の記述も活きないと思われるので、後述のとおり一新した。

大槻氏と協力して私が手掛けた能の復曲・新演出は今回で六曲を数え、本年（二〇一七年）は新たに〈実方〉が予定されている。幸いなことにこれまで大半の試演が一度ならず重演されてきたが、今回の新版〈菅丞相〉も同様に再演の機会を得て、さらに練り上げられることを期待してやまない。

【平成二十六年五月二十六日（木）午後一時開演 国立能楽堂企画公演・復曲再演の会】

復曲能〈菅丞相〉

前シテ（菅丞相の霊）・後シテ（同〓雷神） 大槻文藏

後ツレ（火雷神） 大槻裕一／武富康之

ワキ（法性坊僧正） 福王和幸

ワキツレ（從僧） 喜多雅人／矢野昌平

アイ（能力） 茂山正邦

笛 杉信太郎／小鼓 大倉源次郎／大鼓 河村大／太鼓 三島元太郎

地謡 上野雄三（地頭）／山本博道／浦田保親／寺澤幸祐

長山桂三／谷本健吾／坂口貴信／武田祥照

後見 赤松禎友／泉雅一郎

演出・再構成 村上湛／監修 大槻文藏／制作 日本芸術文化振興会

国立能楽堂部企画制作課

※当日は能に先立ち復曲狂言〈連尺〉（シテ・野村又三郎）が上演された。

扮装と装置

◆面装束

【前シテ（菅丞相の霊）】

鷹・三日月・怪士の類（当日は大槻家蔵・徳若作「錦木男」）／白垂ま

たは白頭（当日は白垂）／初冠／黒単狩衣または黒単直衣（当日は直

衣）／色大口（浅葱・薄黄の類）または白大口（当日は浅葱大口）／鬼

扇

【後シテ（雷神）】

大飛出（当日は鍔仙会蔵・三光坊作「三光飛出」）／白頭／白地袷狩衣

（衣紋）／白地半切／打杖／修羅扇

【後ツレ（火雷神・二人同装）】

鞞／赤頭／輪冠（立物ナシ）／法被（肩上ゲル）／赤地半切／鉾・剣／修

羅扇

【前ワキ（法性坊僧正）】

角帽子／無地熨斗目着流シ（当日は小格子厚板に白大口）／水衣／墨絵

扇／数珠

【後ワキ（同人）】

金入角帽子（沙門）／小格子厚板／白大口／紫水衣／掛絡／水晶数珠／

墨絵扇

【前ワキツレ（從僧）】

角帽子／無地熨斗目／ヨレ水衣着流シ（当日は無地熨斗目に白大口）／

墨絵扇／数珠

【後ワキツレ（從僧）】

角帽子／無地熨斗目／白大口／ヨレ水衣／数珠／墨絵扇

【間狂言（能力）】

能力出立・杖

◆作り物（後場） 車 ※色ナシの紅緞〓紺緞で飾る。脇座に出し、ワ

キこれに乗って床几に掛かる。

型と演出

※前回・平成十四年までの演出との相違点を主に記し、上演当日の選択も付記した。文中、特に明記していない部分はシテの型である。

【前場】

★格式で言う「五壇の法」は大規模な修法なので、勅命を奉じてこれに携わる前ワキは大口僧が適当ではあるが、後場との見た目の変化を狙うため着流シ僧ではどうか↓着替えの都合で今回は前後とも大口僧となった。楽屋に人手があれば着流シ僧から大口僧への着替えは可能であろう。

★ワキの出が旧来は《真ノ名ノリ》だったが、碎けた着流シ姿と格式高い《真ノ名ノリ》とが似合わぬならば《行ノ名ノリ》もしくは常の《草ノ名ノリ》にしてはどうか↓福王流の現行曲に僧ワキの《行ノ名ノリ》がないため今回は常の《草ノ名ノリ》とした。また、たとえ大口僧しかも天台座主の身分でも、曲柄から考えて《真ノ名ノリ》ではあまりに仰々しいと思われたためである。

★今回はワキとワキツレともに舞台上に下居し、前回までのように前ワキが床几を用いることをしない。シテを床几に掛かせて、ワキの位よりシテの位を立てるためである。

★地謡「上歌」「されば仏法王法の」でのシテの出は、前回までのように一度に常座まで出ず、まず一ノ松で止まる。ワキのコトバ「不思議やな」以下、改めて見計らって歩み出し、「夢中の対面」で常座に立ち、ワキに向く。このほうが余情が出る。

★地謡「上歌」「泣けばこそ」の動きは、常座から角へ出、左に取り、

回り込んでワキに対する、あくまで定型を踏まえて旧来どおりとする。

★旧来どおり「クリ」前の《打掛》は聴き（曲の格式を立てるため）、正中やや左に、下居ではなく床几に掛かる。もっとも、見た目に床几の姿が合わなそうならばシテも下居でもよろしく、都合で安座も良い（有職では束帯・直衣の際は安座である）↓当日は床几に掛かった。

★「サシ」のトメは旧来どおりシテとワキとが向き合う。

★「クセ」「東風吹かば」で旧来はワキにアシラったが、このたびは正面向いたままとする。ことに床几の際はそのほうがよろしく、ワキに向かずただ正面を正視し続けるほうが「望郷の孤独感」が出て好適なように思う。

★「クセ」最後「恨むまじや恨みても」で旧来どおりややクモル。そのままワキと向き合ってクセドメ。

★「参内なくは屍のあとの御心ざしと思ふべし」では床几（または下居・安座の居座↓当日は床几）から動かさず、ただ面ばかりワキに向けるにとどめる。ワキを無視するほどではないが意に介さず、一種、傲然たる偉容を表現するため。むろん、床几を用いなかった前回までのように、ここでワキに対して手を突き平伏する型は採ることはあり得ない。

★「さては師檀の御契りも」でワキへ向き、しばらく不動を保つ。面ばかり向けて余裕を見せていたのと異なり、ようやく兆す内心の憤怒を示すため、ここではハッキリとワキに対峙する。

★「まことに参内あるならば」と正面へキッと面を切り、以下地謡「歌」では、旧来の型を踏襲しつつ適宜調整し、「柘榴天神」の姿を見せる。

★「怒り躍らせ給ふこと」で旧来は両袖を巻いたが、今回は後場トメに両袖巻き上げる型とつかぬよう、ここでは左袖だけ巻き、拍子踏み返し

つつ右にノル。

★「炎に紛れ」で前回は左袖返して幕に走り込んだが、今回は（炎上の型の通例として）両ユウケン大きく二つしながら橋掛りに走り込み、そのまま左袖かづいて入る。

★中入。前回までは（雷電）の現行演出に準じ、地謡・囃子が切れたあと無音のうち間狂言が橋掛り狂言座から横板の後見座に移り、そのあとワキ・ワキツレが退場したが、これではいかにも間が抜けて見えるゆえ改めた。すなわち今回は、シテの走り込みから《早鼓》となってワキとワキツレの中入、入れ替わりに間狂言（能力）が杖を突きつつ出て《早鼓》打ち止め、「立チシャベリ」に変える。なお、この「立チシャベリ」は、『狂言集成』所収・和泉流三宅派台本を参考にはしたが、全体にわたりまったく新規に執筆した。

【後場】

★ワキの出の《一声》は、ワキの身分を立てるためか、平成十四年版では少しく重く囃していたが、あまり重からず、旧来よりノッて演奏されたい（ワキの位取りを立てるよりも、参内の意志を鼓舞する感じ）。

★《一声》で笛のヒシギを聞いて車を持ち出すこと旧来のとおり。前回までは車を脇座に置き付ける時、正先に向け少し斜めに据えたが、これだと見た目に不要な「意味」を喚起するので避け、今回は脇正面方向に轆をまっすぐ引く（ワキツレが両脇に立つ間隔を見計らう）。

★「げにや十善万乗の」以下の「上歌」は旧来のように重くなく、キツパリ、サラリと謡う。ワキツレは初め車の両脇に立つが、この句の返シ前《打切》で舞台上下居（ワキツレが立ったままだと邪魔になって、ワキが見所から見えにくいため）。

★「御簾を高く上げさせよく見れば」でワキは幕方を向きつつ右手扇を頭上に挙げ、倒す。「波にはあらで」で自然と手を下ろす。

★「上歌」「不思議やな川波の」地謡は、平成十四年版ではちょっと重くなり過ぎた感あり。ドッシリ凄味を持ちつつも、内部はタメの力を効かせ、間延びして聞こえないようありたい。

★「川波に飛ばせけり」は旧来の「大ノリ」を改め「中ノリ」の「上歌」に直す。「飛ばせけり」まであまり急にカカラず、《早笛》で位ススムようにする。

★《早笛》一段取り、幕上げ、先に剣、続いて鉾を持った火雷神スルスルと出、一ノ松と二ノ松に正面向いて立つ。続いて打杖を持ったシテ、幕内から三ノ松に勢い込んでグイと出ざま左袖巻き上げて正先を見込む。そのあと袖直しつつ後退、正面を向いて立つ。

★「紅波をたたみ」で差シ分ケ、「現はれ給ふ」正面に打ち込んで大きくヒラキ、「辺りを払って」で両ユウケン。この間、ツレ二人は不動。

★「いかでか止まらん」でワキはワキツレにサスト、ワキツレ二人は正面に向いて少し出る。「火雷神怒り」とツレ二人は謡ってから二人とも舞台に走り入り、脇正面に立って（打杖は角寄り、鉾は常座寄り）、「鉾鉄杖」で持ち物を振り上げワキツレを威嚇する態で静止。ワキツレは地謡前まで退き真横（脇正面方向）を向く。この間にシテは一ノ松までドッシリと運び、後見が床几を出すとそれに掛かる（橋掛り裏欄干に腰かけても良い↓当日は事故を懼れて床几に掛かった）。

★剣の火雷神が正中の向かって右、鉾の火雷神が左に立ち、《舞働》は尋常に相舞。段を取るとシテ立ち、舞台に入って大小前に立つ。《舞働》トメでツレ二人は小回りして正中の左右で正面にヒラキ、そのまま退ってシテの左右に立つ（剣の火雷神が向かって右、鉾の火雷神が左）。

★下居していたワキツレは《舞働》で立って数珠を擦る。ワキは床几に掛かったまま何事にも動ぜぬ態で不動。《舞働》の間、ワキツレは前に出て適宜ツレと応酬。《舞働》が済むとワキツレは元の位置に戻り、一度その場でクツロイでキツパリ気を変え、改めて元どおり向き直って下居。

★「かくて時刻も」以降、最後まで、旧来の「中ノリ」を改め「大ノリ」に直す。

★「僧正流るる水に」でシテに向き合掌するとシテはワキに向く。「仮初ながら」でワキは合掌を解きシテに向かい静かに語りかける心で向いたまま静止、「はや退き給へ」でシテに向かい左手をサスト、シテとツレ二人はワキに向いて下に居、平伏（ツレ二人は持ち物を舞台に置く）。「内裏に着けん」とでシテは立って脇座に出、右足を引きざま左袖を大きく返して半身にカマエ（自ら車を曳く心で左袖が轆に掛かるよう低くキマル）、「または賀茂川の」で右手を大きくサシながら身を入れ替えて右に取って大きく回り込み常座に行くと「御車引き付け」で下に居る。

「僧正も車より」でワキは立って作り物を出、正中に立ってシテと向き合う。

★ツレ二人は「はやのき給へ」でワキに向いて下に居、平伏して持ち物を舞台に置くと、腰の扇を抜いて手に持ち（剣と鉾は後見が引く）、大小前に正面を向き並び立つ（剣の火雷神が向かって右、鉾の火雷神が左）。

★シテも「はや退き給へ」でツレ二人と共にワキに向いて下に居、平伏した際に、打杖を扇に持ち替える。

★「げに有難や」で地謡やヤシマルと、シテは立ち、正中のワキに向いたまま大きくヨセイして出、気を変えて大きく正面にサシコミヒラキ、

改めて正面に大きくサシて右に取り橋掛りに行くと、ツレ一人（向かって左）はシテに先立ち橋掛りに行き、続いてシテ、ツレもう一人、みな二ノ松に行き、シテは両袖を巻き上げて欄干際に出、「天満大自在天神」で正面を向いてキマルと、ツレ二人もシテを挟み正面を向いて立ってトメる。これを見てワキは常座方向に少し出て下に居、合掌留。

上演詞章

※小段構成や囃子の工夫等、前回までの上演型に拘らず、私意によって随所を改めた。前述のとおり、「立チシャベリ」は新規に執筆した。

《名ノリ笛》

「名ノリ」

ワキ これは比叡山延暦寺の座主。法性坊の僧正とはわがことなり。さても菅丞相は時平の大臣の讒奏によつて。筑紫安楽寺に流され給ひて候。しかれば怨念の至る所か。帝夜な夜な御悩あり。されば公よりご祈禱のことを仰せられ候ふ間。このたびは五壇の法を行ひ候。

「サシ」

ワキ それわが山はこれ王城の鬼門を守り・悪魔を払ふのみならず。

ワキツレ 一仏乗の峰と申すは、伝へ聞く鷲の御山をかたどれり。

ワキ また天台山と号するは。震旦の四明の洞を移せり。

「上歌」

地謡 されば仏法王法の。されば仏法王法の真俗の理法正しくて。内外を知るも明らけき。御法の花も時を得て。げに空仮中の三諦も。仏法守護の霊地かな。仏法守護の霊地かな。

「サシ」

シテ 家を離れて三四月。落つる涙は百千行。万事はみな夢の如し。う

つつと見るも定めなき。有無の境の善悪の二つ。そのしきぜつを見るに定まらず。移りやすきは旅宿なり。

〔問答〕

ワキ 不思議やな観念諸行の眼の前には。一物さらに曇らざるに。怪し
たる人の見え給ふは。外道変化の競ひやらんと。心を澄ますばかりなり。
シテ うたてやな御心こそ変はるとも。見みえ申ししその姿を。忘れ給
ふは情なし。夢中の対面申さんために。丞相これまで参りたり。
ワキ その丞相の御ために。何しに心の変はるべきさりながら。姿はそ
れにてましますも。鬢髪さらに引き変へて。眉にも霜の翁とは。何し
にならせ給ふらん。

シテ 思ひのあれば一夜にも。白髪となるは理なり。科なき身なればさ
りとも。思ひ思ひしかひもなく。時刻移さず追ひ立ての。官人とくと
の責めをうけて。

ワキ さぞな思ひも菅原や。

シテ 伏見の里の夜の間をも。

ワキ 遅しやとくととの責めを受けて。

シテ 思ひを何と。

ワキ ゆふつげの。

〔上歌〕

地謡 泣けばこそ。別れも憂けれ鳥の音の。別れも憂けれ鳥の音の。聞
こえぬ里の。暁もがたと詠ぜし。思ひをいつか忘れん。いづくとも。い
さ不知火の筑紫路に。流し置かれて憂かりつる。その官人も帰るきはは。
名残り惜しくも思ひ寝の。一夜の内に白髪の。面影も変はるなり。見み
え申すも恥かしや。

〔問答〕

ワキ なほなほ配所にてのおんことども、くわしくおん物語り候へ

〔クリ〕

地謡 げにや君が住む。宿の梢を行く行くも。隠るるまでにかへり見ぞ
する。夢となりにし身の行方かな。

〔サシ〕

シテ しかるに讒臣国を乱し。妬婦は家を破るとは。

地謡 身の上なりける理かな。身にはいかなる罪火も。思はざりしに情
なく。勅諭しきりになり下り。遠流の責めを蒙りて。思はざりしに遠行
の。日数の末も不知火の。筑紫の果てに捨て置かれて。

シテ 憂き年月を過ごしつる。

地謡 思ひの果てはあさましや。

〔クセ〕

地謡 今日と過ぎ。明日とも知らぬ日数ながら。命のままに残り来て。
何待つことのあらばこそ。たよりもあるべけれ。慰みとては都を。思ひ
忘れぬばかりなり。されども年月の。日数は移るならひとて。待たれぬ
秋も急がぬ秋も。移りて光陰を。送る月日ばかりなり。ただ明け暮れは
ふるさとの。軒のしのぶの忍ばしく。思ひ忘れぬたよりにも。東風吹か
ば。匂ひおこせよ梅の花。あるじはなくと世の中の。花もの言ふならば。
ことづてもなどかなかるべき。

シテ 世の中の。憂きをならひと言ふ人や。

地謡 厭はじとての心なる。厭へただ厭ふべきは。鬼こもるとも言ふな
れば。なにゆゑの恨みにや。人を失ふ心ぞや。よしや思へばこれとても。
たださきの世の報ひの。なしたる科のゆゑなれば。恨むまじや恨みても。
因果はのがるまじ。罪こそ悲しかりけれ。

〔問答〕

シテ いかにも僧正に申すべきことの候。

ワキ 何事にて候ふぞ。

シテ われ讒臣の誠天道にこたへ。帝を悩まし申すべし。御悩しきりに及ぶならば。定めて勅使立つべきなり。参内なくは屍のあとの御志と思ふべし。

ワキ 御心安く思し召せ。たとひ勅使ありとて。一二度までは参ずまじ。重ねての勅使いかならん。

シテ たとひ勅使は重なるとも。参内なきこそ肝要なれ。

ワキ 王地に住める身のならひ。勅使三度に及ぶならば。いかでか参内申さざらん。

シテ さては師檀の御契りも。変はらせ給ふか情なし。まことに参内あるならば。八万四千の火雷神。先に追立て丞相が。奇特を知らせ申さんと。

【歌】

地謡 菅丞相の御気色。菅丞相の御気色。にはかに色を交じつ。威武高になり給ひて。さもあれ僧正よ。御参内は情なしと。怒り躍らせ給ふこと。身の毛もよだつばかりなり。折節御前に。柘榴を置かれたりけるを。おつ取り口に含んで。はらはらはらと噛み砕き。妻戸にくわつと吐き掛け。火焰となつて燃え上がる。炎に紛れて失せにけり。炎に紛れて失せにけり。

《早鼓》

「立チシヤベリ」

アイ かやうに候ふ者は。延暦寺第十三代の座主。法性坊尊意僧正に仕へ申す能力にて候。さるにても僧正は。帝王御悩のご祈禱のため。五壇の御修法を行ひたまひて候ふが。なんぼう不思議なることにて候ふぞ。

筑紫にて果てたまひたる菅丞相おん出でありたると申す。そもそもこの菅公は。菅原の宰相是善と申すおん方のおん子にして。いとけなき時より法性坊を師と頼み申され候ふが。ご成長の後は賢才人に超へ器量すぐれ。正二位右大臣の高きに進みたまふといへども。左大臣時平公の讒言により。筑紫・太宰府へ遷されたまふ。しかれば遠流に臨み。御氏寺道明寺。河内の国・土師の里にてのご詠歌に。鳴けばこそ。別れも憂けれ鳥の音の。聞こえぬ里の暁もがな。まった都・紅梅殿。ご愛樹を惜しませたまふご詠歌に。東風吹かば。匂ひおこせよ梅の花。あるじなしとて春な忘れそ。この二歌こそ。丞相名残の御歌とて。世に知らぬ人なきご詠歌にてありげに候へ。さりとも菅丞相。ご鬱憤のあまりにや。御黒髪の一夜にして。ことごとく白髪となりおはしまし候ふが。御心のうちを報せんがため。梵天へ祈誓し鳴る雷となつて。われに憂かりし輩を蹴殺すべしと。御配所・太宰府にして。高山の絶頂に御登りあつて。七日七夜があひだ肝胆を御砕きあつて御祈りなされたるところ。梵天・帝釈これをあはれとおぼしめされけるか。丞相つひに天満大自在天神と。荒ぶる神にならせたまひて候。さるほどにこのほど比叡山に來たりたまひ。僧正にご直談あそばされ候ふは。さだめて玉体安全ご祈禱あれとの勅使立つべし。師檀の契り旧恩のよしみ。かまへて参内あつてたまはり候ふなど仰せありければ。僧正のおん答へに。御詠もつともにては候へども。王地に住める身のならひ。二度までこそは辞退申せ。三度の勅使はいなみがたしと仰せ候へば。菅丞相大きに怒りたまひ。御前にありし柘榴をとつて噛みくだき。妻戸へくわつと吐きかけたまふ。柘榴たちまち火焰となつて燃えあがる。丞相も煙にまぎれ。雷電・黒雲を起こし。内裏をさして飛び行きたまひ。さまざま恐ろしきおんこと御座候ふあひだ。急

ぎ僧正におん出であつて。ご祈禱あれとの勅使三度に及びて候。この上は僧正も是非に及ばず。参内あらうずるとのおんことにて候ふほどに。皆々おん供の用意を仕り候へ。その分心得候へ。心得候へ。

《一声》

〔一セイ〕

ワキ・ワキツレ 朝日影。巡る轅や小車の。飛ぶさへ遅き心かな

〔サシ〕

ワキ さてこのたび法性坊。帝の御惱しきりにて、勅に応じて参内の。車遅しと飛ばせけり。

〔上歌〕

地謡 げにや十善万乗の。げにや十善万乗の。御影も厚きこの御代に。何の障りかあるべき。仏法も栄へ王法の。君の威光もなほ高き。時にあたりて世を守る。験の道も正ししや。験の道も正ししや。

〔問答〕

ワキツレ 不思議やなにわかにか晴天かき曇り。賀茂川白川一つになつて。越すべきやうこそなかりけれ。

ワキ その時僧正車の御簾を高く上げさせよく見れば。波にはあらで丞相の。その怨念の荒御先。矛先を揃へ川波に。立ち塞がりて見えたるぞや。

〔上歌〕

地謡 不思議やな川波の。不思議やな川波の。音は山河に響きつつ。大地震の如くにて。太鼓を鳴らし幢を撞きて。悪魔外道の荒御先は。川波に塞がり。洪水を立てて飛ばせけり。

《早笛》

〔一セイ〕

シテ 雲の波。早く漲る川波に。鳴る神振動おびたし。

〔フリ地〕

地謡 不思議やあれ見よ白川の。不思議やあれ見よ白川の。

シテ 面はさながら。紅に流れ。

地謡 紅波を畳み矛先を揃ふる。払ひの中に。菅丞相かと現はれ給ふ。

面はさながら鬼神の如く。あたりを払つて恐ろしや。

〔フリ地〕

ワキ その時僧正声を上げ。

地謡 その時僧正声を上げ。宣旨の参内いかでか止まらんだ遣りかけよ。御車牛飼。供奉の人々。川波に向かへば。

ツレ 火雷神は怒り。

地謡 何かは渡さんと。乱れ散り立ち向かひ。鉾鉄杖にて追ひ上げ給へば。所は白川の東の岸の。川波遙かに追ひかへす。

《舞動》

〔フリ地〕

ワキ かくて時刻も移りしかば。

地謡 かくて時刻も移りしかば。僧正流るる水に向かひて。ことわり給ふぞあはれなる。仮初ながら師匠の恐れ。または王法の宣旨はいかに。はや退き給へとくどき給へば。菅丞相も一旦の恨み。さらば御車を内裏に着けんと。丞相手づから轅にすがり。所は白川または賀茂川の。横切る波間を露ほども濡らさず。内裏の東門に御車引き着け。はやこれまでぞ暇乞ひ。僧正も車より下りさせ給へば。げにありがたや帝も御平癒。

天下泰平国土安穩。今の世までも天満天神と。現はれ給ふぞありがたき。

以上